

杉並三田会 読書会五月例会

2017年5月26日(金) 午後6時30分～(石橋亭/四面道)

課題図書：中村絃子「ピアニストという蛮族がいる」(中公文庫)

参考図書：同 「チャイコフスキー・コンクール」(同)

更に参考：恩田陸「蜜蜂と遠雷」(幻冬舎)

担当：豊田秀一(S49工、S51修)



著者紹介(中村絃子)

1944年7月25日疎開先の山梨県で出生、父親は陸軍少佐野村典夫。両親の離婚により幼少より母親に育てられる。

三歳でピアノを始め「子供のための音楽教室」第一回生として井口愛子氏に師事。同期には、小澤征爾、堤剛、江戸京子らがいる。慶應義塾幼稚舎から慶應義塾中等部に進み三年在学中、日本音楽コンクールにおいて史上最年少で第一位受賞を獲得。翌年NHK交響楽団初の世界一周公演にソリストとして抜擢され、天才少女としてデビュー。桐朋女子高等学校音楽科を中退し渡米、ジュリアード音楽院に進みロジーナ・レヴィーンに師事。1965年第7回ショパン国際ピアノコンクールで日本人として2人目、4位入賞を果たす(この時の第1位はマルタ・アルゲリッチ)。20世紀最高の音楽評論家の一人とされるニューヨーク・タイムズのハロルド・ショーンバーグの著書「ピアノ音楽の巨匠たち」(1987年)のなかで東洋人ピアニストとして唯一評される。

世界各地で公演をしながらチャイコフスキー国際コンクールやショパン国際ピアノコンクールなど数々の権威あるコンクールの審査員も務めた。

日本では第3回浜松国際ピアノコンクールから審査委員長を務め(第1回は小林仁、第2回は安川加寿子)、創立10年たらずで国際ピアノコンクール連盟に加入するなど一級レベルに押し上げた。

私生活では、1974年に芥川賞作家である庄司薫氏と結婚。同氏は受賞作「赤頭巾ちゃん気を付けて」(1969年)の中で、高校三年生の主人公に“中村絃子さんみたいな若くて素敵なお女の先生について(中略)優雅にショパンなどを弾きながら暮らそうかなんて思ったりもするわけだ”と語らせている。

チャイコフスキー国際コンクールの舞台裏を描いた「チャイコフスキー・コンクール」で1989年に大宅壮一ノンフィクション賞を、文藝春秋(1990年1月号～約1年半)連載の「ピアニストという蛮族がいる」で同誌読者賞を受賞。その他多数の魅力的な文章を残す。

2014年に大腸がんが見つかり、休養と復帰を繰り返すが、72歳の誕生日の翌日である、2016年7月26日に死去。生前3,800回を超える国内外での演奏会を通じて聴衆を魅了した。

2008年紫綬褒章、2009年日本芸術院恩賜賞

2016年旭日中綬章追贈

(出典:各種公表資料)

感想

昨年、72歳のお誕生日を迎えた翌日7月26日に、惜しくも大腸がんでお亡くなりになりました中村絃子さんを偲んで、多くの著作の中から、「ピアニストという蛮族がいる」及び「チャイコフスキー・コンクール」を取りあげて、読書会の皆様と読み・語る機会を頂きました。

華麗なピアノ演奏だけではなく、文筆にも多才を発揮された中村絃子さんの作品だけに、皆様から幅広い、かつ内容の深い感想やご意見を沢山頂き、大変有意義なひと時を持つことが出来ました。

私が最も興味を持った話題は、日本の西洋音楽の黎明期における先駆者の方々の苦労や悲劇のストーリーでした。特に、海外遠征中にウィーンで投身自殺された久野久さんの物語は、当時の教育環境を鑑みるととても悲しいお話です。また、コンクールについては、長期間にわたる予選を通り抜けて最後にトップを勝ち取るまでの、スリリングな経過が臨場感を持って紹介されています。「実力」「運」「曲とのマッチング」「審査員」等々、多次元の要素が絡んでいく様子が大変興味深かったです。

“著者は「蛮族がいる」と表現されていますが、伝えなかった事は全てのピアニストに向けた温かい応援メッセージではないか・・・”という久津大先輩のご洞察に、大賛成でした。

豊田秀一

参考：「ピアニストという蛮族がいる」要旨

I. ホロビッツが死んだ

アルトゥーロ・トスカニーニ (伊)

- ワンダ (5人いた子供の末娘) ← 結婚 → ホロビッツ (ロシア・ユダヤ系)
一人娘ソニア (バイク事故が原因で24歳で早死)
- ホロビッツは大トスカニーニの義理の息子にあたる。ワンダ夫人は猛妻家&名裏方
- 30歳年上のラフマニノフがホロビッツの精神的な支えになる
- ホロビッツ自身は、精神不安定状態を繰り返し、ワンダ夫人と別居し男性付き人と
- ホロビッツのお墓は、トスカニーニ家の廟に

II. 六フィート半のしかめっ面

- 付け根の広い鼻を見て弟子を選ぶ (ホープカーク女史)
- 巨大な手 (フランツ・リスト) vs 華奢で繊細な手 (ショパン)
- ラフマニノフとマルフィン症候群

III. 神よ、我を許したまえ

- ヨハン・セバスチャン・バッハ族の一大音楽家ファミリー (17c~19c中で千名以上)
- モスクワの作曲家同盟の家 (1950年代はあこがれだったが今は人気無し)

IV. 女流探検家として始まる

- 我が国最初のピアニスト、幸田延 (こうだのぶ) の生涯。幸田露伴は兄。
- 音楽取調掛 (のちの東京音楽学校、東京芸大) を経て、明治22年音楽界官費留学生第1号として米国ボストンへ (1年間)、帰国後、ウィーンへ5年間留学。
- 明治28年東京音楽学校教授に就任。名声を得るが希望・訓練中傷も広がり明治42年勇退
- 勇退後は個人的なピアノの会「審声会」で上流階級の子女のみを弟子に
- 生涯独身で昭和21年に76歳で亡くなる。

V. タイム・トラベラーの運命

VI. 音楽が人にとり憑く

- 幸田延直系の愛弟子、久野久 (くのひさ) の生涯。
- 久野久は15歳で上野の子科に入り初めて本格的にピアノを習うが、4年後には全卒業生中の白眉と言われるまでに成長。演奏ぶりが過かゆたような激しさで聴衆の絶賛を得る
- 大正12年文部省海外研究者として欧州遠征の船に出るが、2年後にウィーンで投身自殺
- 久野久は明治19年大津市で近江商人の血を引いた質屋の3人兄妹の末娘として生まれた
- 幼時に石段から転落し足を負傷したのが原因で、片足をひきずるようになる
- 両親亡き後、叔父の元で育てられ、琴・三味線・長唄などを習得
- 兄の弥太郎は久に、因習に満ちた邦楽より、新しい洋楽を東京で学ぶことを勧める
- 明治30年代の日本の西洋音楽事情は、本場とはあまりにもへだたりがあつた
- 邦楽を聞いた西洋人は、不協和音や呼吸感から、美しくないと全く不評

VII. 久野久を囲んだ「日本事情」

VIII. 最初の純国産ピアニスト

IX. ピアニッシモの残酷

- 15歳で音楽学校予科に入学した久野久は、指導教官から将来を懐疑的に見られ退学勧告を受けるが、拒否しその後、火を喰くような決まじい練習を開始
- 幸田延の音楽学校辞任に前後して、久は母校の助教職に就任し、留学経験の無い純国産ピアニスト第1号となる
- 邦楽の家元制度を手本とした厳しい指導方法
- 著者も若いころ修正に苦勞した日本独特の「ハイ・フィンガー奏法」について
- 大正3年7月に赤坂溜池付近で交通事故にあい13か月入院する
- 大正7年「ベートーベンの午後」独奏会が盛況で事故からの完全復帰を果たす
- 大正12年36歳にて初めてヨーロッパへ、ベルリンでコンサートに通うも自身の演奏会は開かず。その後ウィーンへ移りザウワー教授の教えをまう
- ザウワー教授の1回目のレッスンでは賞賛されたが、2回目のレッスンで久の奏法をことごとく否定され、その内容が週刊の口から広まった
- 大正14年4月ウィーン郊外バーデンのホテル4階から飛び降り自殺 (享年35歳)

X. 鍵盤のバトリオット

- 1918年ポーランド独立宣言後、初代首相になったイグナツ・ヤン・パデレフスキ
- 24歳になってチェルニー教則本を本格的に練習しはじめ、28歳にパリデビュー、31歳でアメリカデビューを果たし、カリスマ性があり女性から熱狂的な支持を受ける

XI. カンガルーと育った天才少女

XII. 銀幕スターになったピアニスト

- オーストラリア・タスマニアで1912年に生まれた自然児アイリーン・ジョイス
- 7歳の時本土に移り、尼僧から6ペンスでピアノの練習を受け才能を発揮する
- ドイツのバックハウスからも認められ14歳でライプツィヒ音楽院へ留学
- その後、ロンドンに移りグラモフォンでの自己録音がきっかけで、18歳でデビュー
- 演奏のみでなく、その美貌から映画にも出演し大人気となるが、教習家院 (きよほうへん) も激しく、1963年突然引退。1991年3月に76歳で死去

XIII. キャンセル癡にも理由がある

- ミケランジェロは1965年初来日以降、73年、74年、80年と四たび来日したが、予定通りの日程をこなしたのは65年の一回だけ
- 「高額のギャラをもらいながら不十分な演奏をしたら聴衆に申し訳ない」との事

XIV. 蛮族たちの夢

- ピアノの歴史は250年余りだが、その間これほど沢山の名作大作難曲を頂く楽器は無い
- ヨーロッパ中心から東洋人も含めたサバイバル競争がますます激しくなる
- ピアニストは探検家のように聴衆を求めて旅に出て、いろいろな体験を経験する
- ピアニストになるための練習時間コストが巨大で豊かな社会では将来が不安だが我が蛮族は怒々と進む